

## 『19』 舞踊と衣装

1992年9月25日 東京新聞 夕刊

ある日本舞踊家が五十肩になった。肩が痛くて腕が上がらない。ところが、そのために袖が揺れなくて、かえって踊りが良くなった。

これに似た話は、中村歌右衛門の芸談でも聞いたことがある。年をとって、体が思うように動かなくなつた頃になってやつと、袖が重たそうな感じが出てきて、十七のお姫様の役が本物らしくなるのだそうである。

ちよつと聞いたところでは、ずいぶんおかしな話だという気がしないでもない。舞踊といえば、まずは体を動かすものであるはずなのに、体が動かなくなつてやつと踊れるとは、いったい何としたことだろう。

しかし古来、舞踊とは体を包んでいる衣装を見せるものだった。というか、人は生身の体ではなく衣装の美しさを見たのである。衣装が体だった、いや人そのものでさえあった。

× × × ×

それはなにも舞踊にかぎったことではない。洋の東西を問わず、服装が持っている重要性は、現代の人間には想像もできないものがあつたにちがいない。たとえば『源氏物語』の時代には、男たちは、恋する女の顔や体の美しさを眼で確かめてから愛したのではない。彼らが見たものは、せいぜいが「いだしくるま」、つまり牛車の簾からのぞいている衣の裾と

## 『19』 舞踊と衣装

1992年9月25日 東京新聞 夕刊

髪の毛の端くらいのもだった。それでも男たちは文字どおり、恋で死ぬ思いをしたのである。

身にまとう衣装が気に入ったって、ほんとに愛されたことにはならないわ、と現代の女性なら言うかもしれない。しかし、よくよく考えてみると、衣装はきわめて信頼に価する判断基準だとも言えるのである。少くとも、当世風の「三高」、つまり高学歴、高収入、高身長をすべて兼ね備えていたのだ。そうではないか、立派な表装は、まずは特権階級の印であり、裕福な生活の保証であり、眼を喜ばせる美そのものでもあった。

× × × × ×

現代では、衣裳というものがさほどの威力を持たなくなってしまった。それ自体は喜ぶべきことなのだろうが、しかし舞台芸術の場合には、残念だと思うこともないではない。たとえば、つい先頃も英国ロイヤル・オペラの来日公演があったモーツァルトの『ドン・ジョヴァンニ』『フィガロの結婚』『コシ・ファントゥツテ』には、どれにも登場人物が衣装を交換して恋の相手をだますところがある。が、その場面に説得力をもたせるのが、現代ではとてもむずかしい。私たちは衣装ではなく中身を見るからだ。舞台が胸に響く時代もあったはずだと思うのだが。バレエなども、今では透けるほど薄い衣装という印象があるけれども、昔はずいぶんご大層なかつこ

## 『19』 舞踊と衣装

1992年9月25日 東京新聞 夕刊

うをしていたようである。一七世紀の宮廷バレエの銅版画で、吉原の花魁道中そっくりというのも残っているし、あの女性遍歴で有名なカサノヴァの『回想録』によれば、彼が一七五〇年に見たバレエの名手デュブレは、男性なのに、床までの長さの前開きのローブをまとい、背中までとどくカツラを着け、おまけに仮面をつけていたという。その扮装からも想像できるように、どうもあまり激しい動きはしなかったらしい。それでも、衣装の揺れ動くさまが、名人芸の名に価するものだったのだろう。

ずいぶん前に『バレエの衣装の歴史』という図版を見たことがあるが、その変りようは目覚ましいものだった。事実、一八世紀前半には、パリ・オペラ座で、カマルゴというバレリーナがくるぶしが見えるほど短い（！）スカートをはいたというので、スキャンダルになった。それから考えれば、『白鳥の湖』でおなじみのクラシック・チュチュなど、どうても正視に耐えるしろものではない。

その図版はかなり前に作られたもので、おもしろいことに将来の予想までついていたが、それによると、一九七〇年代には全裸で踊るように描いてあった。以来、楽しみにしているのだが、残念なことに、今もってそういう噂は耳に入っていない。

もっとも最近の新作バレエの衣装にはいわゆる総タイツというのが多いし、トゥ・シューズなども少

## 『19』 舞踊と衣装

1992年9月25日 東京新聞 夕刊

くなってきたから、例の図版もあながち嘘をついたわけではない。

(追記。一九七四年初演のブテイ振付『失われた時を求めて』、七九年のフリン振付『サロメ』には全裸と見えるダンスがある)

× × × ×

そういえば今から三十年ほど前、私の友だちの友だちで、水着姿の見合い写真を作ったという話があった。母親が「娘のほんとうの容姿を見ていただきたいの」と言ったと聞いて、ドヒヤツとのけぞったものだが、案外、時代を先取りしていたのかもしれない。

それよりも気になるのは、ぜんぶ脱いでしまった後は、どうなるのかということだ。振袖から水着になった後の見合い写真は、脳や内臓の断層撮影にもなるのだろうか。もちろん、この先もまだ見合い写真などというものが存在するとしての話だが、しかし、たとえ衣装が消えても、こちらのほうは形を変えても残りそうな気がする。というのも、人に美しきを見いだしたい欲求こそは、人間にとって本源的なものではないかと思うからだ。